



啄木のうた

石川正雄編

現代教養文庫

編者略歴

石川 正 雄 (いしかわ まさお)

1900年 函館市に生る

石川啄木の遺児京子と結婚、石川家を継ぐ

1968年 死 亡

《著 書》「父啄木を語」「啄木八生日記」

〈お願い〉

☆ご愛読ありがとうございました。小社ではみなさまの声を参考に、より良い本を作るよう努力しておりますので、本書の読後感をお聞かせくだされば幸いです。また内容や造本についても、お気づきの点がありましたらご指摘ください。

☆現代教養文庫の定価は、すべてカバーに明記してあります。

☆万一、落丁乱丁の場合は、直接小社にお送りくだされば早速お取替します。

☆本書巻末に記載の広告中、定価に変更がある場合もありますので、あらかじめご了承ください。

現代教養文庫 307 啄木のうた

© 1961

昭和36年1月30日 初版第1刷発行

昭和53年7月30日 初版第61刷発行

編 者 石 川 正 雄

発 行 者 小 森 田 一 記



発行所 株式会社 社会思想社

(113) 東京都文京区本郷 1-25-21

電話 代表 (03) 813-8101

振替 東京 6-71812

0192-10307-3033

又弘社印刷・田中製本

現代教養文庫

307

啄 木 の う た

石 川 正 雄 編

社 会 思 想 社

本文写真 大竹新助

ほか

カラー写真 大竹新助

本文カット 近藤正史

はし が き

啄木の歌というと、いとも簡単に、女学生流のセンチメンタルの、お涙頂戴のと、軽く一蹴する人がいます。それらの人が、啄木の歌をどの程度読みこなしているのか解りませんが、啄木自身は、自分の歌について、こんなことを言っています。

「一生に二度とは帰って来ないいのちの一秒だ。おれはその一秒がいとしい。ただ逃がしてやりたくない。それを現わすには、形が小さくて、手間暇のいらぬ歌が一番便利なのだ。

——おれはいのちを愛するから歌を作る。おれ自身が何より可愛いから歌を作る。」（感想文『一利己主義者と友人との対話』）

それは人生をいとしむが故の、心のさけび！ といえましょう。またこうも言っています。歌は「深い味のあるのでなければならぬ、古いことだが、心のこゑでなければならぬ」と。さらにまた歌集『一握の砂』刊行直後、一友にあて「僕は平生意に満たない生活をしてゐるだけに、自己の確認といふことを刹那々々に現われた「自己」を意識することに求めなければならぬやうな場合がある、その時に歌を作る。刹那々々の自己を文字にして、それを読んでみて僅かに慰められる、随つて僕にとつては、歌を作る日は不幸な日だ、刹那々々の自己を見つけ満足する外に満足のない、全く有耶無耶に暮した日だ、君、僕は現在歌を作つてゐるが、正

直に言へば、歌なんか作らなくてもよいやうな人になりたい、——これだけ言へば君は更に僕の歌に対する態度も解つてくれたに違ひない。」とっています。かれの歌はこれだけの要意と、感情がこめられているのです。それでいてその歌口は大変やさしく、老若誰にも親しみ易く口ずさみ易い。そこにかれの歌のすぐれた文学的特徴があります。それを一口に、女学生流の感傷の、お涙頂戴のと一蹴するのは、多分文字の表面だけより読み得ないからではないでしょうか。そののみか啄木流の歌なら誰でも作れるなんていいます。ところが啄木死後五十年になんなんとするのに、未だに第二の啄木といわれる歌作りが出ないのは何故でしょう。結局、啄木の歌が、そんな安易なものでないという事実の証明ではないでしょうか。

啄木の歌はよく、一首々々が短篇小説のようだといわれます。つまり僅か三十一文字の中に、それほどの内容がふくまれているのでしょう。それを一々叙述したら老大なものになりそうです。そこでここでは、啄木自身の短文や詩の一節、また絵画的背景などを配し、多少でもその抒情を浮かび上がらせようと再編してみました。正直いうとこのアイデアは、教養文庫編集長杉田茂さんのもので、その案によってやって見たものです。だが思う半ばにも達しませんでした。これはひとえに私の不勉強のいたすところで、それでももし、この中から多少でも、啄木の歌の抒情を汲みとることが出来ますなら、それはひとえにこの編集に協力して下さった、杉田さんの功に帰すべきであることを、一言申し添えておきます。

啄木のうた

目次

編者はしがき

我を愛する歌……………九

感傷！……………一〇

砂……………一五

怒り！……………一八

焦燥……………二三

自嘲……………二六

寂寥……………二八

追憶……………三四

平らなる心……………三六

我に似し友……………四五

ふるさと……………四七

漁民のうた……………四八

その人々！……………五四

少年の日	六
郷愁	六
流浪	七
ハコダテの歌	六
慕情	六
詩の都・札幌	八
歌うことなき小樽	八
さいはての町	八
夜汽車	六
雪中行	六
漂泊の愁	四
手套を脱ぐ時	五
春の雪	六
こころかすめし思ひ	六

夏情一束……………	一二
秋の感傷……………	一六
秋風のころろよさに……………	二四
冬……………	三二
生活の歌……………	三三
つとめ……………	三六
くらしの想ひ……………	三八
正月のうた……………	四六
病床にて……………	四八
親・妻・子……………	五三
愛児の死……………	五七
啄木のうた拾遺……………	六二
石川啄木の生涯(年譜)……………	八九

我を 愛する歌

一生に二度とは帰つて来ないのちの一秒だ。おれはその一秒がいとしい。ただ逃がしてやりたくない。それを現すには、形が小さくて、手間暇のいらぬ歌が一番便利なのだ。實際便利だからね。歌といふ詩形を持つてるといふことは、我々日本人の少ししか持たない幸福の一つだよ。おれはいのちを愛するから歌を作る。おれ自身が何より可愛から歌を作る。

『利己主義者と友人との対話』より



若き啄木（20才）





感傷ノ

東海の小島の磯の白砂に
われ泣きぬれて
蟹とたはむる

蟹に（詩）

潮満ちくれば穴に入り、
潮落ちゆけば這ひ出でて、
ひねもす横に歩むなる

東の海の砂浜の

かしこき蟹よ、今此処を、
運命の浪にさらはれて、

心の龕の燈明の

汝が眼よりも小やかに

滅えみ明るみすなる子の

行方も知らに、草臥れて、

辿り行くとは、知るや、知らずや。

大海にむかひて一人

七八日ななようか

泣きなむとすと家を出でにき

大といふ字を百あまり

砂に書き

死ぬことをやめて帰り来れり

ふと深き怖れを覚え

ちつとして

やがて静かに臍はそをまさぐる

いと暗き

穴に心を吸はれゆくごとく思ひて
つかれて眠る

やはらかに積れる雪に
熱^{あつ}てる頬^ほを埋^うむるとき
恋してみたし

しつとりと

水を吸ひたる海綿の

重さに似たる心地おぼゆる

大いなる水晶の玉を

ひとつ欲し

それにむかひて物を思はむ

何^{いづ}処^くやらむかすかに蟲のなくごとき

こころ細さを

今日もおぼゆる

砂

ひと夜さに嵐来りて築きたる
この砂山は
何の墓ぞも

いのちなき砂のかなしさよ
さらさらと
握れば指のあひだより落つ

頬につたふ
なみだのごはず
一握の砂を示しし人を忘れず